

## 第一章 『不思議なお話しを』

冥界にはおよそ音というものが存在しない。

天界や地獄と同じように、所謂あの世と呼ばれる死後の世界。当然そこに住む者もほとんどが幽霊であり、それは人間以外の動植物、虫にまで至る。

死人に口なし。

死体に限った話ではなく、そして人に限った話でもなく。

文字通り語るべき声も言葉も持たない彼らは、ただ静かに輪廻の、或いは成仏の時を待っている。

最近になって、冥界全体が俄に騒がしくなってきたという傾向もあるが、実際のところそれも幽霊が活発に漂っていたりするだけで、音という点から見れば変わらず静寂を保っている。

妖夢は、そんな静かな冥界が好きだった。

数年前に初めて現世へと下りた時の事。その騒々しきは冥界で生まれ育った妖夢にとって衝撃的であり、刺激的でもあったが、すぐに目を回してしまった。

四方八方から生きた音が聞こえてくるというのは、それまでに体験した事のない、まったく

新しい感覚だったのだ。

冥界では自分さえ静かにしていれば、昼でも夜でも物音一つ立たない。そもそも冥界において音を出す事が出来るのが、祖父の妖忌がいなくなった今となっては妖夢と幽々子の二人だけ。更には幽々子も普段はそれほど口数が多い方ではないのだから、自然と無音の時間も多くなる。時折幽々子の友人である八雲紫や、プリズムリバー楽団が訪れた際には多少騒がしくなるものの、所詮はその程度。

賑やかなのは嫌いではないが、そんな環境で生まれ育った妖夢にしてみれば、やはり慣れ親しんだ静寂の中の方が落ち着ける。その上程よい小春日和ともなれば、昼寝には絶好の場面だといえるだろう。

「……………ふあっ!!」

眠りに落ちる寸前、首がカクンと下がった所で妖夢はハッと我に返った。

しかし中途半端に睡眠を邪魔された体は気怠く、同じように頭の中も靄がかかったようにすつきりとしめない。

寝てもいないが、起きてもない。そんな曖昧な意識は思考を飛躍させ、さながやら夢のよいうな突飛な考えをもたらせる。そんなどこから始まったのかも解らない、取り留めもない言葉の羅列を追い払おうと首を振って、すぐに何をしていたかを思い出した妖夢が手元へと視線を落とした。

「あちゃー……」

ページを開いたまま、持っていた所が少し皺になってしまった書物。一点書かれた字が滲んでいるのを見つけて、妖夢は気まずそうに口元を拭った。

「これは……どうしよう」

近付けてみたり遠ざけてみたり、掲げてみたり透かしてみたり。どうしたところで滲んだ文字は戻らない。触れてみるとすでに乾いているが、周りの湿った形跡は明らかに涎によるものだろう。

やってしまったという思いが妖夢の中に広がるが、同時にこのくらいなら大丈夫なのではないだろうか、とも考える。

滲んだとはいえ、文字はまだ普通に判別出来る。つまりは読むに当たって支障はないのだから問題ない、という訳だ。

もちろんそんな事はないのだが、どうにかして怒られない方へと考えようとする妖夢には、残念ながらそれが解らなかつた。

これが自分の本ならば、妖夢も戸惑ったりはしないだろう。しかしながら、今妖夢が手にしているのは、白玉楼の書齋に置かれている数多の本の内の一冊。つまりは幽々子の私物である。

「何事もなかつたよう戻しておけば……無理だろうなあ」  
呟いて、妖夢ががっくりと肩を落とした。

元々嘘や隠し事が下手だという自覚はあるが、たとえそうでなかったとしても、相手があつた幽々子である。何かあつても、そして何もなくても常に全てを知っているかのような物言いをする亡霊の姫。実際のところは結構な割合で適当にホラを吹いているだけだったりするのだが、それに油断しているとすぐに足下を掬われてしまうのだ。

「きつと、これもすぐに見つかるんだろなあ……」

以前、幽々子から預かった人魂灯を無くした時には、それはもう盛大に怒られた。声を荒げたりはしなかったものの、静かな口調に込められた突き刺さるような怒気は、今思い出しても背筋が震える。

同じ過ちを繰り返してはいけない。

人魂灯の時は発覚するまでに数日の間があつたけれど、きつと最初から解っていたのだろうと、今にしてみればそう思える。そして今回も、黙っていれば数日後に大目玉を食らう未来が待っているのは間違いないだろう。

「今度は失敗しない……!!」

自分も少しは成長したものだと思ひ深げに頷いて、妖夢はよしと一つ気合を入れると、汚してしまつた本を手に書齋を出たのだつた。

それこそが正しいのだと、信じて疑う事もなく。

「成長したというのなら、そもそもこんな失敗はしないと思うのだけれど」

呆れたような幽々子の声が、まるで質量を持っているかのように重くのし掛かる。

駆け出すように書齋を後にしてから数十分。嫌な汗が背中を伝っていくのを感じながら、妖夢はただ俯くしか出来ないでいた。

普段からよく小言を言われたりもするが、こうして面と向かつて説教をされるのは珍しい。

それこそ人魂灯の一件以来だろうか、妖夢が身を縮こませながら頭の片隅でそんな事を思う。反省していない訳ではない。むしろはつきり怒られていると解る分、悔しさと自分に対する情けなさが込み上げてくる。

だが、長いのだ。

正座をしたままの足はすっかり痺れてしまい、少し指先を動かすだけでじんとした何とも耐え難い感覚に苛まされる。更には長時間じつとしていた所為か、全身がむずむずとしてこそばゆい。出来るならば今すぐにでも立ち上がって駆け出したい衝動に駆られるが、対面する幽々子が同じように正座をしている以上、僅かに動かす事すら出来ないのが現状だった。

こうなると、妖夢にとっては最早説教ではなく拷問のようにさえ思えてくる。あるいは幽々子もそれを解ってやっているのかもしれない。実際、彼女の話は先程から少しづつ逸れていき、

日々の生活態度に対するものから、今は昨日の夕飯が遅かった事についてのものになっている。「とまあ、妖夢の足を痺れさせるのはこれくらいにしておくとして」

「……やっぱりですか」

更に二十分程が経過したところで、話す事を話して満足したとでもいうように、幽々子がすつと立ち上がった。

てっきりそのまま部屋を出て行くのかと思ったが、彼女はそのまま妖夢の方へと近付くと、すぐ隣にちよこんと膝を抱えるようにかがみ込んだ。

その童女のような仕草と満面の笑みに思わず妖夢の胸が高鳴るが、そんな至福の時も一瞬の事。今後はもう少し気をつけなさい、という言葉と共に文字通り妖夢が転がされた。

「\$※☆∞◇# \$!？」

途端に崩された両足に電流でも流されたような衝撃が走り、声にならない叫びを上げる。

「あら、はしたないわよ妖夢。もう少し慎重ある行動を心掛けなさいな」

「だ、誰の所為ですか……誰の……」

「だって、妖夢ったら途中からずつとそわそわしているのだもの。最初はすぐに終わろうかと思っていたのだけれど、反省が足りない子にはお仕置が必要でしょう？」

言われて、しかし妖夢はこれがお仕置きなどではなく、単純に幽々子が面白そうだと思った末の行動なのだと解っていた。彼女はそういう人なのだ。現に今も楽しそうにころころと笑っ

ている。

妖夢としても、こんな子供の悪戯のような真似は止めてほしいと常々思っているのだが、幽々子がこういう事をする時は必ず今回のように建前上はお仕置きであったりと、中々言い出しづらい場面ばかりなのだ。それも解ってやっているのだろうが、結局今回も言い返せないまま、やられっぱなしになっている。

案外、はつきりと申し出れば止めてくれるかもしれない。

そんな風に思ったりもするのだが、無邪気に笑う幽々子を見ると、まあいいか、と思っ  
てしまう。

その度に妖夢はなんだか自分がダメな人間（と幽霊）になっていつている気がするのだが、幽々子の笑顔が見られるのなら、それも安いものだといえる。

「というか、幽々子様はよく平気ですね……」

一通り転がり回ってようやく足の痺れが治まってきた妖夢が、目尻に涙を浮かべて幽々子の方を見た。彼女は妖夢が持ってきた本を興味なさげにぱらぱらと捲っていた手を止めて、こちらへと向き直る。

「妖夢はどうして正座をしていると足が痺れるか、知っているの？」

「え、と。血流が悪くなつてどうのこうの、とか」

「ええその通りね。そして私は？」

「……ああ、なるほど」

西行寺幽々子は亡霊である。亡霊とは即ち死者の霊であり、当然心臓も動いてなければ、血も流れていない。

普段が活き活きとしすぎている為に忘れそうになるが、幽々子自体は千年もの昔に死んでいののだ。

「それにしても、また懐かしい物を持ってきたわね。貴方といい紫といい、そんなに人の過去が気になるのかしら」

ばらららら、と最後まで流すように捲った本を今度は後ろから同じように流して、ぱたんと閉じた本の表紙を幽々子がじつと見つめた。

妖夢が汚してしまった本。それはいつの物とも知れない古い文献であり、西行妖の下に誰かが封印されているという事を綴ったものである。数年前、偶然この文献を見た幽々子は、死霊の世界である冥界に封印された亡骸というものに疑問と興味を持ち、それを復活させようとした。後に春雪異変と呼ばれるそれは、結局幻想郷の巫女たる博麗霊夢らによって寸前の所で止められてしまう。以降は幽々子も興味を失ったのか、特に封印されている亡骸について言及する事はなかった。

だが、今となってはそれでよかったのだと、妖夢は思う。

西行妖の下に封印されている亡骸。それは幽々子本人なのだ。

それが判明したのは異変が解決された後。久々に出てきた紫によって教えられたのだが、幽々子は本当に忘れていたらしい。

封印が解けてしまえば、止まっていた時間が再び動き出してしまふ。それは即ち、幽々子に二度目の死が訪れるという事。もしあの時春が集まりきっていたら。霊夢達がやってこなければ。妖夢が彼女達を追い返していれば。どれか一つ、何か一つでも違っていれば、今この場に幽々子は存在していなかったかもしれない。

霊夢達に負けた事は悔しいが、負けて良かったと妖夢は当時を振り返る。敬愛する主を亡くしては、果たして自分は何の為に生きるのかさえ、解らなくなっていただろう。

「紫様も……ですか？」

暫しの静寂の後、間を保たせるように、妖夢がふとした疑問を投げかけた。

投げかけてすぐに、ああしまった、と思うが、出してしまった声を引っ込める事は出来ず、また俯いてしまふ。

なんでもすぐ訊いてしまふ癖を直す。

それがここ最近の妖夢の目標であり、今回もその一環として書斎に籠もっていたのだ。

とはいえ、何をどうすればいいのかが解らず、手当たり次第に本を読んでみたものの、それどころかなるはずもなく、気付けばうたた寝をしてしまったというのが、今回の真相である。つまり妖夢としては、読んでいた本がたまたまその文献だったというだけで、狙って幽々子

の事を調べていた訳ではない。しかし、だからこそそこに紫が含まれるのが気になったのだ。「最近……西行妖を咲かせようとした後辺りからかしら。訊いてくるというより、やたらと昔の事を話に出してきたりするようになったのよねえ」

しかし、妖夢の不安は杞憂だったようで、幽々子は特に咎めるでもなくすんなりと答えてくれた。

訊いていい事と駄目な事の差がまだ妖夢にはよく解らないが、今回はどうやら大丈夫だったらしい。

「最近って、それもう年単位の話じゃないですか」

「長く生きていると、一年二年なんてあつという間に過ぎていくものよ。貴方が生まれた時だって、まるで昨日の事のようにだわ」

「そう言うと、なんだかおぼあ……いや、なんでもありません」

言いかけて、しかし背中に悪寒を感じて押し止めた。半人半霊なのだから最初から半分死んでいるとはいえ、生きている方まで早死にしたくはない。

そうやって妖夢が震えていると、仕切り直すように、幽々子が「それにしても」と溜息交じりに呟いた。

「紫ったら、私が覚えてない思い出せないって言うとかと『毎日呆けているからだ』とか『歳は取りたくないものね』なんて言ってくるけど、自分だってほとんど覚えていないくせに、

どの口が言うのやら、だわ」

「幽々子様は、本当に覚えていないのですか？」

「妖夢だって、先週のお昼の献立を全部覚えていたりはないでしょう？ それなのに百年も千年も昔の事だなんて、覚えていての方がおかしいのよ」

「そんなものですかねえ……」

先週の事と百年前の事を同列に語ってもいいのかと妖夢が疑問に思うが、まだ幼い自身でさえ、幼少の頃の記憶は敢えて思い出さなければどんどんと曖昧になっていつてしまう。今となつては、祖父の妖忌の事でさえ、思い出した顔や声が本当に正しいのか、少し自信が無い。

そう考えれば、幽々子の言っている事もあながち間違つてはいないのかもしれない。

覚えている方がおかしい。

だからこそ、この文献のように記録として残していくのだろう。

「ああでも」

何かを思い出したように、幽々子がぼんと手を叩いた。

「これは本当に最近の事なのだけれど、夢を見るわ」

「夢とか、私でも見ますよ」

「黙りなさい妖夢。貴方の食べる事しか考えていないような夢と同じにしないでちょうだい」

「いや、夢の中でまで何か食べてるとか、そんな幽々子様じゃあるまいし——痛いっ!？」

スコーン、と。閉じた扇に額を撃ち抜かれて、勢いよく後ろへ倒れる妖夢。

「夢の中でたらふく食べたはずなのに、起きてみたらそんな物はどこにもない……この哀しさがまだ妖夢には理解出来ないようね」

「……理解したくもないです」

赤くなつた額をさすりながら妖夢が起き上がると、幽々子は「まあ」と一息置いて、  
「昔の事をね、見るのよ。時々」

「数年前におやつにと思つて戸棚に置いておいたお饅頭を、勝手に食べてしまわれた時の事ですか？」

「あれは美味しかったわ。でもそんな最近の事ではない、もっと昔、うんと昔の事よ」  
「それこそ百年前、千年前の、と幽々子が続ける。

「でも、それが正確にどれくらい昔の事なのか、よく解らないのよねえ……」  
「やっぱり呆けているからであいたあつ!？」

どこに持っていたのか、二本目の扇が先程と同じ所を撃ち抜いて、またしても妖夢が後ろに  
転がった。

「まあなんでもいいわ。ちゃんと片しておきなさいね、それ」

「はあ……」

それ以上は何もなく、幽々子は立ち上がるとそのまま部屋を出て行ってしまった。

後に残された妖夢は、暫く見送るように幽々子が出て行った先を眺めていたが、姿が見えなくなった所で一息。部屋の中へと視線を戻し、置かれたままになっている本を拾い上げると、ぱらりとページを捲った。

富士見の娘。つまりは生前の幽々子の顛末が書かれた文書。

改めて見てみると、なんとも居た堪れないものだと思う。

死を操る能力。

考えてみれば、出鱈目な力だ。幻想郷では妖怪や一部の突出した人間などのおかげでそれほど問題にはなっていないが、なんて事のない、普通の人間しかいない場所にそんな力を持った者がいればどうなるか。

上手く想像出来ないが、強すぎる力を持つ者はいつだって、どこでだって孤立する。

今で言えば、紫がちょうどそのような状態なのだろうか。と考えると、いやいやと妖夢は首を振った。

「紫様の場合は自分から勝手に孤立してるような節もあるし」

呟いて、ハっとした妖夢が慌てて周りを窺う。

「異常無し……？」

こういう時に限って、どこからともなく現れるのが八雲紫という妖怪なのだ。

だが、これも杞憂だったのか、物音一つ立たずに静かなまま、一向に現れる気配は無い。

しかし、彼女はいつだって唐突に何もない所から顔を出してくる。一番嫌なタイミングで、一番嫌な場所から。

紫の場合は、本人の力がどうというよりも、そういう事ばかりしているから孤立しているのでは、と思つて、また妖夢が首を振る。

「長居は無用、つと」

見つかる前に逃げるが吉。果たして紫を相手にそれが意味のある事なのかは解らないが、妖夢も幽々子が出て行ったのと同じ襖から、けれど逆方向へ、抱きしめるように本を持ってすててと駆けていった。

φ

「やっぱり下は賑やかだなあ……」

久しぶりの喧騒に、妖夢がキョロキョロと忙しく視線を投げては、その度に感嘆の息を漏らす。

先程本を元の書架に戻してから、小一時間が経つただろうか。思うところがあつて幻想郷へと下りた妖夢だったが、人で溢れた表通りに早速目が回りそうになつていた。

何度来ても慣れないものは慣れない。